



婦人と子ども

第四卷第貳號

鼯鼠の起源

やまとの翁

いつの頃でしたか、まづ、ある
處に、慾張りの金持老爺さんと
正直物の貧乏老爺さんがあり
ましたとさ。

さて、此二人の老爺さんたちは

一所の畑をお仲間にして、持って居りましたが、或時のこと、
 丁度同じ時刻に、二人とも、同じ種を持って行って、此畑に播
 きました。

所が、神様は、正直老爺さんを恵んで下さいますから、この老
 爺さんの播いた種は、ずん／＼芽を出させて呉れましたが、慾
 張老爺さんの播いた種は、一向に芽を出して来ませんでした。

そこである日の朝、二人揃って畑へやって参りました所で、慾
 張老爺さんは、「今芽を出して居るのが、自分の播いた種だ、こ
 の所は、己の地面なんだから」といひ出しましたので、正直老
 爺さんは、吃驚して、「いや、そんなことはない筈だ、それは
 私の播いたのに違はありません」といって争って見ましたが、

慾張老爺さんは中々承知しません、そして、随分無理じやありませんか、次の様にいふのです。

「どーも、然しこう二人で、争って見ても、つまりは水掛論で切りもない話しじや、で、お前さん、己の言ふことを信じてくれないのなら、まあ仕方がないから、明日の朝早く、夜の明けぬ前に、二人でこゝに來て見よう、すると、神様が此喧嘩の裁判をして下さるに違ないから、」

そー言はれたもんですから、正直老爺さん、仕方なしに、家に歸って行きますと、慾張老爺さん、一人そこに残って居って、夜中かゝって、其畑へ深い穴を一つ掘りまして、さて、家に歸って行って、自分の息子を連れて來て申しますには、「お前は、

今から、此穴の中に這入って居て、明日の朝、己が来て、此種
 は誰が播いたのかといつて問ふたらお前は、此穴の中から『そ
 りや、金持老爺さんのだ、貧乏老爺さんのじやない』と言つて
 答へるのだよ』
 と言ひ付けまして、上から藁などを一杯冠せかけて、分らない
 様にして歸って行きました。さて、翌朝になりまして、二人の
 老爺さんを始め近所隣りの人さへ、澤山に其畑へやつて参りま
 した。すると、金持の慾張り老爺さんは、大勢の中から出て來
 まして、天にも聞江る様な大聲を上げて申します、
 『神様！どーかお告げを願ひます、これは私が播いた種でしよ
 ーか、夫とも此貧乏老爺さんの播いたのでしよーか。』



大勢おほいせの人は、ふだんから、慾張よくばり老爺おやじさんのことも、正直しやうじき老爺おやじさんのことも、よくしって居ゐまして、こんどの事も、どうせ、慾張よくばり老爺おやじさんのことも、よくしって居ゐまして、こんどの事も、どうせ、慾張よくばり老爺おやじさんが可いけないのだらう、だから、あんなに大聲おほいせで祈いのちつたとして、神様かみさまは屹きつ度と、正直しやうじき老爺おやじさんのだといって下くださるに違ちがひないとい口くちには出だしませんでも、十人じゅうにんが十人じゅうにんまで、皆みな全ぜんじ様に思おもつて居ゐりますと、意外いごひにも地面ぢめんの中から聲こゑが聞きこえて

「そりや金持かねもち老爺おやじさんのだ、金持かねもち老爺おやじさんのだ」と言いひましたから、正直しやうじき老爺おやじさん始め、集あつまって來きた大勢おほいせの人も皆みな吃驚おどろしてどうした事ことかとあきれて居ゐりますと、今度こんどは天てんの方かたからまことに清きよらかないゝ聲こゑがして

「今の言葉ことばは聞きくには及およばん、播まいた種たねは、正直しやうじき者の貧乏びんぼう老爺おやじ

さんのに違いない」

と言つて、夫から、一々 慾張老爺さんのした事を、大勢に言つて聞かせられましたので、大勢の人は、あつと言つて、今更慾張老爺さんの惡計に驚いて居ります。

そこで、神様は、又、穴の中の息子に向はれまして、

「汝は親の惡事を助けるとは、不届な奴じや、其罰として、太陽の空に輝く間は其穴の中を出ること罷りならん」と言ひ渡されました。

すると、其息子は、其儘其處で、鼯鼠になつて仕舞ひました。

鼯鼠が、晝太陽の光を恐れて、地の中へくと逃げて回はるの
は右の譯からだといふ事です。

めでたしく。